

宮澤賢治センター通信

(岩手大学内)

(題 字／金森由利子)

第 16 号

発行人

〒020-8551
盛岡市上田四丁目3番5号
電話 019-621-6672
FAX 019-621-6493
宮澤賢治センター(岩手大学内)
発行責任者 鈴木幸一

目次

- 巻頭言 理事挨拶……………1
- 定例研究会の概要……………2～5
- 「ミニ・茶話会」便り……………6・7
- 賢治と音楽の会便り……………7・8
- 宮澤賢治記念短歌会報告……………9
- 特別寄稿……………10・11
- エッセイ……………11
- 会員投稿……………12～14
- イベント案内……………14
- ウルグアイだより……………15
- 国際シンポジウム……………16

巻頭言



二〇一二年の北上川とイギリス海岸

宮澤賢治センター理事 山本昭彦

今年は8月も後半になってからが暑かった。湿気もあったが雨は降らない。盛岡で見る北上川も川幅は狭く、川辺がやたらと広い。これを眺めながらひよっとしたら今年は見えるのではないかと期待し始めていた。花巻のイギリス海岸のことである。賢治が農学校の教師だった頃、イギリス海岸とあだ名をつけて、農場実習の間に仕事の区切りがつくたびに二日か三日ごとに遊びに行った処、と「イギリス海岸」という作品にある。「それは本たうは海岸ではなくて、いかにも海岸の風をした川の岸です。北上川の西岸でした。」

はたして9月22日に行ってみたら見事に露出していた。もう夕闇が迫り、泥岩層も白く光つ

てはいなかったが川床があらこちら覗いている！このあたり今は公園としてもずいぶん整備されているが、遊歩道を外れ、草の合間を掻き分けて川へ降りてみる。川面に露出した川床はぬるつとしていてまさに粘土、滑りそうである。表面の無数の穴は生物の生活痕か(と思いたくなる)。ちよつと大きな丸い窪みは恐竜の足跡か(と思いたくなる)。さすがに目の前にバタグルミの化石は転がってはいなかったが。

既に秋、日の入りは早く、暗くなりかかるなかで勝手に空想を膨らげる。百万年くらい前にはここは海辺だった、と賢治が考え、化石や大型動物の足跡も見つけ、後の科学によって賢治の想定が正しかったことが裏付け

られたあの場所である。川床の窪みでは流れが淀み、わずかに逆流して渦になっているところもある。淡い褐色の泡の固まり(湯の花?)の見えるところもある。そして川床ばかり見えないで少し顔を上げると、このあたり、岸がずとんと直角に落ちていく。その断面は白っぽい。高さはせいぜい2、3メートルだが、確かにドーバー海峡の白亜の断崖を思わせるものがある。6千万年の昔、あるいは6億年の昔、そして百年前、賢治さんが水遊びしていた頃、農学校生徒たちの歓声、何かを書き留める賢治、などいろいろなことが浮かんでくる。「それに

実際そこを海岸と呼ぶことは、無茶なことではなかったのです。なぜならそこは第三紀と呼

ばれる地質時代の終り頃、たしかにたびたび海の渚だったからでした。」賢治はその「証拠」を三つ挙げている(小説でもエッセイでもない、生徒との生活を楽しむ報告とも言えはよいのか不思議なそして真摯な文章「イギリス海岸」、ちくま文庫版『全集6』所収)。

賢治の令弟・宮沢清六の『兄のトランク』(ちくま文庫)には、猿ヶ石川との合流点あたりによく見に行つた、とある。右岸の高台からその位置が見える。ここは賢治が言うように「修羅の渚」でもあるのだが。「岩手日報」には「岩手河川国道事務所が20日から四十四田、御所、田瀬、綱取、早池峰の5つのダムと猿ヶ石発電所で放流量を調整し、21日にはイギリス海岸に近い朝日橋の水位が下がり、泥岩層が出現した」とあった。

賢治自身が農学校の生徒達とのいきいきとした実習風景を書いたものには「台川」という作品もあるが、この「海岸」は後

には「銀河鉄道の夜」のプリオシン海岸になってゆく。また、ジョバンニが銀河のお祭りを見ている、と言うと「あ、行つておいで。川へはいらないでね」と病床から返すジョバンニのお母さんの言葉も耳に残る。川は危険な場所でもある。賢治の短歌には北上川連作もあるが、何よりも大正7年の「青びとのながれ」(六八〇番)。文庫版『全集3』のそら恐ろしさが思い出される。

昨年は大学での「北上川流域学」の授業の一環で、国交省北上川ダム統合管理事務所等の御協力を得て四十四田ダムからゴムボートで下る機会があった。

八月、炎天下、両岸の草木(大きな胡桃の樹!)や野鳥を眺めながら下り、いつもとは違う流域の眺めを楽しみつつ、川の中に段差があることなども知り、時には川の真ん中の岩礁を避けるために一生懸命パドルをかき、ボートの縁から足を川に浸し水の上の爽やかな小旅行を楽しんだ。学生達も大喜びだった。この川がゆつたり蛇行しながら矢巾、紫波、日詰とのどかな景観を下り石鳥谷、花巻へ。さらに支流を集めながらずっと下り石巻に至る。昨年3月の大震災を思う。

(岩手大学人文社会科学部教授)

定例研究会の概要

第65回 7月20日(金)

▽会場 農学部1号館第1会議室

▽講師 近代文学研究家 森 義真氏

▽演題 「宮沢賢治と平泉——「大盗」に新説——」

▽司会 岡崎 正道
参会者 27名。

一、はじめに

2011年6月、「平泉」は世界遺産に登録されました。正確には、「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」として、中尊寺など五つの寺院と遺跡が対象となりました。更に、柳之御所など五つの遺跡が追加登録を目指しています。

こうしたホット・スポットである「平泉」と宮沢賢治との関わりを、作品を通して考察したのが、今回の発表となりました。

具体的には、「中尊寺」を題材とした文語詩二篇の解釈と伝記的事実、更には、それらをめぐる三つの謎について掘下げたものです。

この稿の初めにあたり、三つの謎について指摘しておきます。

(一) 賢治の平泉訪問は、1912(明治45)年5月の一回だけか？

(二) 森莊巳池編『宮沢賢治歌集』収載の中尊寺連作の短歌七首には、莊巳池だけが知り得た賢治のメモがあったのではないか？

(三) 文語詩一百篇「中尊寺(一)」に記された「大盗」とは誰を指すのか？
これらの謎に対する筆者の見解については、この稿の後半部分に述べます。

二、文語詩「中尊寺(一)」「中尊寺(二)」について

賢治が「中尊寺」と題した文語詩は二篇あります。これを区別するために、全集編集者が便宜上、(一)と(二)を付けました。

即ち、文語詩一百篇の詩篇を「中尊寺(一)」とし、文語詩未定稿の詩篇を「中尊寺(二)」としています。しかし、詩の内容からすれば、「中尊寺(一)」は、「中尊寺金色堂」あるいは「金

色堂」と題した方がしっくりすると思われまふ。

「中尊寺(一)」が成立するまでは、下書稿①②③の流れに加えて、「冬のスケッチ14」という先駆形を發展させた文語詩未定稿「つめたき朝の真鍮」から下書稿③に継承される流れがあります。詳しい発展の流れと解題は、新校本全集に譲ります。

ここに記したいことは、中尊寺金色堂前に建てられた賢治詩碑は、最終形ではなく、「中尊寺(一)」下書稿③が刻まれていることです。比叡山延暦寺の賢治詩碑「根本中堂」(昭和三二年)の大きな影響を受けて、昭和34年5月に、金色堂建立850年祭を記念して建てられました。

建立にあたっては、中尊寺側から宮沢賢治の会(盛岡)に相談があり、菊池二郎と森莊巳池が詩篇を選びました。その結果、ペン書きの最終形よりも鉛筆書きの下書稿③の方が、奔放であり面白いということで刻まれた次第です。これらの背景については、『宮沢賢治碑真景』(吉田精美、単独舎、1993)や莊巳池のエッセイ「芸術に関する走り書」季節風第一〇巻第二号、1967)などに詳しく記述されています。

一方、文語詩未定稿「中尊寺

(二)」には、「明治四十四年一月より」の短歌二首(歌稿A、Bとも)が先駆形として存在します。

歌稿Bの原稿(宮沢賢治記念館でこの部分の複製原稿が販売されている)を見れば、この二首の下部余白に、一部の赤ペンとほとんどの鉛筆で文語詩(あるいは短歌)が試作されています。新校本全集校異篇には、その試作から読み取った短歌が再現されています。

森莊巳池編『宮沢賢治歌集』には、これらの試作も含めた形で短歌七首が、中尊寺連作として収載されています。

三、三つの謎について

賢治の平泉訪問は、1912(明治45)年5月の一回だけとは考えられません。年譜には記されていませんが、中学時代の短歌を文語詩にする過程で二、三度は、印象やメモの確認のために訪れた、と考えます。更に、「中尊寺(一)」の先駆形から下書稿に至る過程においても、訪問しなければその着想を得ることはできないと思います。実証することはできませんが、そうした訪問が作品に反映されているのだと思っています。

二つ目の謎について、莊巳池



森義真氏

の書き起こした字句の中には、新校本全集が読み取ったもの以外の文言があります。賢治のメモから着想した莊巳池の創作という解釈の仕方もあると思いますが、歌稿Bの他に、賢治が中尊寺での印象をメモしたものがあつたのではないか、と思われる。

謎の三点目が、本稿の要です。即ち、「大盗」とは誰を指すのか、現在の主流は、源頼朝説でしょう。谷川徹三、宮城一男・対馬美香、田口昭典、それに牛崎敏哉が唱えております。

「平泉三代の栄華を一朝にして灰燼に帰せしめ、金色堂だけなぜか焼き払わなかった」(田口)という理由のようです。

一方、宮沢賢治説は、「賢治は言葉盗む詩人であつた。(略)中尊寺の十字燐光を盗もうとしたのは賢治自身ではなかったか」(原)というように、しおはまやすみ、原子朗、水上勲、佐々木邦世が主張しています。

その他に、達谷窟の悪路王(小倉豊文)、大和朝廷(イン

ターネット)、そして、豊臣秀吉・浅野長政説もあります。筆者は、この豊臣秀吉・浅野長政説を唱えます。賢治研究界では重流で異説だと思われませんが、以下の理由に拠ります。

小田原征伐とそれに続く奥州仕置によって国盗り行為をはたらいだ豊臣秀吉とする説です。秀吉自身は赴いてきていませんが、天正19年の九戸政実の乱を平定して引き上げる際、浅野長政が中尊寺経の内「紺紙金銀交書一切経」の大半を持ち去り秀吉に進呈、それを秀吉が高野山に寄進したという史実に基づきます。この史実については、賢治も知っていたと思います。浅野は秀吉の氣を引くために中尊寺経を持ち去ったのでしょうか。しかし、経を奪ったが、本尊・阿弥陀如来には手を出せなかったという意味ではないでしょうか。浅野は豊臣の五奉行の筆頭で、奥州仕置では実行役として中心的な役割を担いました。

現在、五四〇〇巻近くあったという「紺紙金銀交書一切経」の内、高野山金剛峰寺が「四、二七九巻」所蔵し国宝に指定されています。中尊寺には「一五巻」(やはり国宝)のみが所蔵されているだけです。

なお、この着想は私のオリジナルではありません。管見では

賢治研究界でこの説はありませんが、インターネットのブログ(開設者の名前は不明)に大和朝廷などの異説の一つとして記載されていることから取り入れました。ご叱正を期待しています。

(森 義真 記)

(紙幅の関係から、「中尊寺(一)」、「(二)」の評釈を割愛せざるを得ませんでした。短歌二首と七首も省略しました。了承ください。)

第66回 9月13日(木)

▽会場 農学部1号館第1会議室

▽講師 岩手大学教育学部教授 木村 直弘氏

▽演題 「樺の木は顫える
—宮澤賢治(土神ときつね)管見(承前)—」

▽司会 大野 眞男
参加者 23名。

狐が賢治童話ではお馴染の動物であることは言を俟たない。古来、狐は稲荷神として祀られる霊獣であると同時に、「狐媚」という言葉に象徴されるように人間を誑かす怪獣とされてきた。つまり、狐のキャラクターは、すぐれて両義的である。こうした、悪役かどうかといった

狐のキャラクター設定の差異を超えて、狐を主人公とする賢治童話における極めて重要な共通点について最初に言及したのは賢治学者・小沢俊郎氏であった。氏によれば、「とつこべとら子」(茨海小学校)「雪渡り」の三作品は、「狐が人を化かす」という素朴な民話に愛着を感じつ、それを狐の立場からみれば人の方が自分で化かされているのだと、物の見方の座標軸をくるりと変えて見せた様な例」として捉えられうる。

では、賢治作品中最も狐が頻出する童話である「土神ときつね」には、こうした「視点の転換」は見出せないのだろうか。この問いを出発点としテクストを精査したところ、この「土神ときつね」には、多くの「視座転換」のメルクマルが意図的に配されていること、特に従来まったく重要視されて来なかった「美学」という語が物語全体における「視座転換」のキーワードとして位置づけられていることがわかった。詳しくは、拙稿「宮澤賢治(土神ときつね)管見 —狐はなぜ「美学」をかた(語・騙)るのか—」(『岩手大学教育学部研究年報』第七一号所収)を参照されたい。

さて、この童話は、従来「奇麗な女の樺の木」をめぐる男性へ

宮澤賢治センター入会のご案内と 原稿募集のお知らせ

岩手大学では、賢治生誕110年の年である2006年の開学記念日(6月1日)を期して、「宮澤賢治センター」を設立いたしました。

その骨子としては、
① 広く岩手大学における宮澤賢治の関心を集約する
② 組織は学長裁定のNPO的組織とし、趣旨に賛同する人は誰でも加入できる

③ 設置場所は岩手大学内「百年記念館」とし、日常の連絡先は岩手大学地域連携推進センター(TEL019-621-6672、FAX019-621-6493、Eメールkenji@iwate-u.ac.jp、ホームページhttp://kenjicgciwate-u.ac.jp/)とする
④ 会費は当分徴収しない
—などです。

賢治に関心があり、広い意味で岩手大学にご縁のある方であれば、どなたでも歓迎いたします。メールや電話、ファックスで入会申し込みができます。会員の方には、「宮澤賢治センター通信」をお送りしています。

なお、「通信」の次号(第17号)は3月20日発行を予定しています。会員各位の原稿をお待ちいたします。2月末までにメールまたは郵送で、宮澤賢治センターまで送付してください。内容によっては掲載できない場合がありますので、ご了承ください。

宮澤賢治センターでは設立5周年を迎えた昨年、ロゴマークを作りました。作成者はアートフォーラムいわての中島香緒里さんで、宮澤賢治の代表作「雨ニモマケズ」をスタンプに見立て、改めて賢治の想いを多くの人々の心に刻み込みたい。そういう想いで作成したということです。



宮澤賢治センター
(岩手大学内)

である土神と狐との「恋愛の三角関係」の物語という構図で捉えられることが多かった。つまり、土神と狐の二項対立ばかりがクローズアップされ、「樺の木」の意味については取り上げられることが少なかったが、本発表の目的は、この樺の木にも大きな意味づけがなされていることを示すことにある。文中、樺の木はよく青ざめ、顫える。

すでに発表者は、賢治作品において、その授業板書で御馴染みの「芸術とは情緒を他人に感染しむる手段である」というトルストイの思想と、美的感激とは感じられた調和であり、この調和感は「対象の中に認められる生命の動き又は姿様が吾々の本性に融合してビブラションー即ち震動を起す時である」という石川三四郎の思想とが融合され、さまざまな用語法に反映されていることを明らかにしてきた（拙稿「〈摩擦〉〈震動〉〈感染〉——宮澤賢治『セロ弾きのゴーシュ』におけるトルストイの芸術論と石川三四郎の動態社会美学のインターフェイス」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第十号所収を参照のこと）。この（土神ときつね）においても、たとえば、土神の声が青い空へと上向してから地の樺の木の処に落

ち、樺の木は顫えるという表現で暗示されるのは、空と大地、換言すれば、彼岸と此岸の中間を示す境界性の象徴である青色が樺の木（本来は黒）に反映される過程であった。それは「震動」描写を伴って明確に示されている。実はこうした上・下向の往還表現は、この物語中最も印象的な表現、すなわち、青かったはずの草が「白い火」になつて燃え、青い空が、その底で赤い焰がどうどうと音を立てて燃えている真つ暗な穴になるという、空と大地に関するさまざまな逆転のイメージに収斂する。それはまさに「視座転換」を主題とするこの物語にふさわしいシーンである。

さらに、こうした天地の（あるいは視線の）逆転表現は、童話〈シグナルとシグナレス〉で「夢の水車の軋りのやうな音」という表現が出てくる箇所、すなわち、男女のシグナル柱が昇天する際の会話シーンや、童話〈よだかの星〉での、よだかの上・下向運動に「摩擦」音たる「きしきし」と、他の鳥たちの「ぶる（ぶる）」という「震動」の要素が組み合わされていたシーンとも呼応する。

特に看過されるべきでないのが、〈シグナルとシグナレス〉で前掲「夢の水車の軋りのやう



木村直弘氏

な音」と「ピタゴラス派の天球運行の諧音」とが関連付けられている点である。古来、五度音程（振動数比三・二）の連続から音階音を導き出すピュタゴラス音律とオクターヴ（振動数比二・一）の連続との間の誤差、いわゆるピュタゴラス・コンマを一オクターブ内にどう分配するかが調律の基本問題だったわけだが、この誤差が大きいほど、「軋り」という表現に繋がる「不協和な」響き＝振動を惹起することになる。まさに、シグナル柱と同様直立する樺の木の顫えは、情緒の感染を受けていることを暗示しており、また、青ざめる表現の多用は、その対象がすぐれて境界的、換言すれば両義的な存在であることを象徴している。

青は、保阪嘉内宛て書簡・一六五では、赤を経由してそれに至る「いかり」の色である。あ

るいは詩〈春と修羅〉にあるように、「修羅」たる自らが（よだかのように）「気層」の中を「はざしりゆきき」（摩擦と上・下往還）しながら感じる「いかり」の、換言すれば「修羅」の色でもあった。狐の知ったかぶりと土神の神としてのプライドの間には、「修羅」たる賢治自身も最期までそこから逃れられなかった「今日の時代一般の巨きな病」としての「慢」が通底している。まさに、一見、二項対立的に置かれた土神と狐は実はドッペルゲンガーであり、樺の木は、これら両者の転換を媒介する装置であった。このことは、樺の木も土神や狐と同様、賢治自身の分身であることを含意しさえする。これが天沢退二郎氏の指摘する、未完成な「分裂相」として表現された「春と修羅」の詩人の憂悶そのものの顕現」に由来することは、もはや自明であろう。そこには、自分が正しいと慢心し一つの見方のみに執着するとそこに「摩擦」＝「軋轢」が生れることを自戒する賢治自身が垣間見られるのである。樺の木の「震動」や土神の歯軋り＝「摩擦」等に絡めて巧妙に「労作」された「視座転換」という主題を、この作品を含む一連の狐を主題とする童話群や前掲〈よだかの星〉〈シ

グナルとシグナレス〉だけでなく、なべて賢治文学に通底する大主題と捉えることも可能かもしれない。今後の課題としたい（本発表は、平成二二・二四年度岩手大学研究拠点形成・重点研究支援経費「岩手豊稜学——宮沢賢治を中心とした岩手の研究——」による研究成果の一部です）。

（木村 直弘 記）

第67回 10月12日(金)

▽会場 農学部1号館第1会議室

▽講師 宮澤賢治センター会

員 吉田 美和子氏

▽演題 「尾形亀之助と宮沢賢治」

▽司会 羽倉 淳

参会者 27名。

尾形亀之助は宮沢賢治の四歳年下、同世代の詩人であり、『銅鑼』『歷程』を通じての草野心平の盟友である。「みんなと欠伸をしても彼は一人で欠伸をしたい」と、草野心平は亀之助の独特の生き方と詩風を評した。亀之助詩集は思潮社「現代詩文庫」に一冊あるが、その詩はいま読まれることも少ない。尾形亀之助の名前は賢治を読む人にとって、二つの点で意識される



吉田美和子氏

にすぎないだろう。一つは賢治の童話「オツベルと象」「猫の事務所」「ざしき童子の話」を掲載した雑誌『月曜』の主宰として。もう一つは賢治没後に岩手日報紙上に追悼「明滅」を寄稿した詩人として。

尾形亀之助は宮城県でも有数の資産家の家に生まれ、画家を志して上京するが絵筆を捨て、詩にも倦んで帰郷、虚無と自堕落の典型のようにして戦時下に短い生涯を終えた詩人である。亀之助は「オツベルと象」の白象の嘆き「うれしいな、サンタマリア。苦しいです、サンタマリア」のセリフが気に入って、へんてこな節をつけていつも歌っていたと、草野心平は証言している。亀之助は『月曜』の経営に詩人たちのユートピアを夢見たのだからがたちまち赤字で瓦解。詩人は詩を書いていくだけでは生きていけないというものが、今も昔も世の常識というものだ。その「生計をなす」という課題が賢治をも苦しめたのではなかったか。

ずの賢治は必死になっておのれのなかの牙を矯め、決して喰らぬデクノボーになろうとし、人のために身を捨てる菩薩行を夢見ることで世の中と折り合っていることとした。「正しい迷信もない」亀之助は何もせず寝ころんだまま、勤勉節約・銃後の守り・一億火の玉の大合唱の時代に「大きな戦争がほつ発してゐることは便所の蠅のやうなものでも知つてゐる」とうそぶいて、昭和十七年暮れ、誰にも看取られずひっそりと死んだ。その詩風と生き方においてまったく対照的であるにもかかわらず、詩人たちになにかが通底していると思えてならない。「生まれてすみません」と語った太宰治の頭上をも覆った東北の暗い空、飢饉に疲弊した農村。そのなかで裕福な家に生まれてしまった息子たちの、ある自己処罰的な感情である。

実際の交流として、尾形亀之助は宮沢賢治に会ったことがあったのだろうか。当時、仙台の文学仲間の間にこんな風聞が流れたという。——「彼は晩年の宮沢賢治を、花巻の郷里に訪ねているが、その後で、彼は宮沢に失望し、詩をつくるのが厭になったと云っていたと聞いた」（仙台の友人中山登の証言）否、会ったことはない草野

心平は即座に否定したが、こんな噂は私たち読者には興味深い。直接会うことはなかったとしても、伝え聞く晩年の賢治の姿に亀之助は『月曜』時代のイメージと異なるものを感じて「失望」したのかもしれないからである。「詩をつくるのが厭になった」とは激しい言葉である。もしかすると宮沢賢治は、都落ちした亀之助のひそかな心の拠りどころだったかもしれない。賢治に恋をしていたのだ、その恋に破れたのだと、私は妄想する。

追悼文「明滅」は奇妙な作品で、屈折した亀之助の心理を反映する。しかも、どうみても「銀河鉄道の夜」へのオマージュである。不謹慎なパロディという見方もありうるかもしれないが、

これはおおいなる謎である。賢治が没してわずか一カ月後、10月27日の新聞掲載。未発表・未完成の錯雑したこの童話草稿の内容を、亀之助はどのようなにして知りえたか。知る可能性はあるか。拙著『単独者のあくび 尾形亀之助』（木犀社2010年）では、一章を設けてそのつながりを追跡してみた。もちろん天沢退二郎氏が「ないないづくし」の暗合だと言うように、なんの証拠もないので

あるが、読者には夢を見る権利があるというものだ。それが詩を読む楽しみである。

私の推論では、「明滅」が逆行する汽車を舞台に「銀河鉄道の夜」を思わせる構図になっているのは、偶然ではない。繋ぐわずかの細い糸は石川善助と草野心平がもたらした情報とされるが、そのかすかな信号を受信して即座に作品化しえたのは、亀之助が『春と修羅』を正確に読んでいたからである。感応する準備があったということだ。

「明滅」は草野心平編集の『宮沢賢治追悼』に採録されるときに続編「その二」が追加された。「明滅その二」は、仙台とおぼしき夜の街を、酔つ払った心平と亀之助が腕を組んで「よっしょ、よっしょ」と走る話である。心平は泥酔して「おーい、宮沢ア」と呼び、街の明かりをブラットホームだと見て走っては「汽車もいないし、宮沢もない」と泣く。そんなカムパネルラ賢治を追うジョバンニ心平を、亀之助は優しく、すこし辛辣に眺めている。心平は賢治のことについて、もう亀之助を見ない。書かれているのは亀之助の孤独である。そんな友情と別れのこの夜が、私はことのほか気に入っている。

「明滅」はその後の『宮沢賢治研究』からは心平自身の手によって全文削除された。十字屋書店の賢治全集完成後、心平は中国大陸に渡り亀之助は仙台で没した。尾形家の大邸宅は仙台空襲で焼失した。いまの仙台市西公園である。敗戦後復員した草野心平が最初にやった仕事は、『歷程』の復刊とともに、失われた亀之助詩集を復刻することであった。

（吉田 美和子 記）

◆短信

2011年10月28日の定例研究会で、中村一基氏（岩手大学教育学部教授）が『ドリムランドとしての日本岩手県』考」というタイトルでは話題提供をしましたが、その内容が論文になり、岩手大学図書館で閲覧可能となりましたのでお知らせします。『文月』第7号（池川敬司教授退職記念号）に収録されています。



「三・茶話会」便り ——茶一話——

定例会終了後の茶話会の様子をお伝えします。今回もまた講義への質問や自身の考えなど忌憚の無い話し合いを自由におこない、十分に楽しめる場となりました。尚、茶話会の担当頂いた石田紘子副代表より原稿を頂きましたので掲載させていただきます。

◎ 7月20日、賢治センター例会を目指して農学部1号館の前まで来た時、右手花壇に丈7、80センチの小さな木々が一面に生えているのが目に飛び込んできました。見覚えのある葉の形からすぐに「ぎんどう」の実生と分かりました。なんといっぱい、なんと可愛い幼木たち、かつて「ぎんどう」の苗木を一生懸命に探したことのある私には衝撃的な光景でした。その傍らに堂々と一際高く直立している「ぎんどう」の木を今更のようには思い出し眺めました。

衝撃は冷めず、茶話会で早速お知らせした所、本日講師の森氏から、つい先日葎崎で、岩手から贈った「ぎんどう」の木が大きく育っているのを一瞥になったというお話がなされました。なんとというタイミング、しかも

勿論、保阪庸夫氏(嘉内ご次男)を訪問されたとのことでした。

葎崎の「ぎんどう」の木は、嘉内が理想とした「花園農村」の碑の除幕式の際に葎崎文化ホールに植樹されたものでした。碑は、銀河鉄道の機関車と客車2両を模したお洒落な形、客車には嘉内の文章と嘉内に宛てた賢治の手紙が刻まれています。

山梨県山本知事さんが杜陵小学校(盛岡)に贈ってくれた「やまなし」の木は、葎崎へのご縁を継ぐ懸け橋となり、後年岩手県達増知事さんが「ぎんどう」の木を贈ることによって、保阪家・葎崎アザリア記念会と本県の友情物語が本格的に始まりました。

賢治センター例会の会場前の「ぎんどう」の木は、仰ぎ見ると、偶然ではなくまるでここに立つのは当然だったのだと言わんばかりに堂々としています。

8月のお盆過ぎに、あの小さな「ぎんどう」たちが気になって夕方訪れてみると、花壇から外れた幼木たちは整理され随分少なくなっていました。

そして今日、10月12日の例会日、もう初めから何もなかったかのように元の芝生だけの花壇に戻っていました。そして、堂々と立つ「ぎんどう」は、風を受けて揺れ、葉を打ち鳴らし1本

だけでざわざわと豊かな音を立てていました。1号館の玄関に向かう私の左右の耳に届く音の大きさは確かに違うのです。

(石田 紘子 記)

◎ 賢治さんの「よーさん」は花城尋常小学校4年生の時の作文ですが、現在、鈴木幸一宮澤賢治センター代表が、農林水産省生研機構ファンドから「スズキラボ」として支援され研究されていることが「よーさん」と

関係深い「桑とカイコ」でその縁を面白く感じました。研究は桑による薬効、医療費の削減、アンチエイジング、蚕の冬虫夏草による脳機能向上等多岐に渡り、また「経埋ムベキ山」と岩手バイオリングの関係等賢治さんが聞いたら身を乗り出し聞くに違いないと思いました。

◎ 「土神ときつね」を通し、惑星と恒星、星の色、星座の形、



星の生成、天と地(天動説と地動説)、土の黒と花は黄・白・赤・青になる違い、震えの違い、ツァイスの望遠鏡と顕微鏡、音の世界、ピタゴラス誤差、怒りと色、シンメトリの美とその受け止め方など、それぞれの対比を通した中に、多彩な賢治像を見に行くと面白く角度のある発表と思えました。

賢治さんの「土神ときつね」の原稿の表に赤インクで「土神・退職教授 きつね・貧なる詩人 樺の木・村娘」と載っているようですが、貧なる詩人は賢治さん自身をいい、他の「土神」と「樺の木」はたれを指すのか興味のある所です。

嫉妬深い土神に偽善の心を止められぬままの《貧なる詩人》賢治《が殺される。しかし、その狐は、うすら笑ったようになつて死んだ》と書かれています。が、その《笑い》に賢治さんの思いとしては、成仏《を表していると考え人もあり、また《煩惱即菩提》の姿をいうと語る人もいます。

それは仏教に《悉有仏性》としてすべてのものに《仏性》があり、狐にもその生命はあるとされる考えです。そこには、如来蔵の考えとして本覚思想があり、すべてに仏の生命があるのだからそのまま成仏で、修行す

る必要がないという考え方もありますが、日蓮はそこに「理の一念三千」と「事の一念三千」の立て分けをしています。「理」とは理論として仏の生命はすべてに備わっているが、働きとして表にあらわす事が出来ていない。働きとして現すことを「事」と言い、有名な修行の例を鏡にたとえ、磨かなければ《無明》、磨けば《法性真如の鏡》となるという、磨き方は《只南無妙法蓮華經と唱えたてまつるを是をみがく》というたとえられています。賢治さんはあくまでも日蓮の教えを実践の中で取り組んでいたものと思います。

また、「樺の木」について宗教学者のミルチア・エリアーデの説によれば、かく民族に信仰の基に「生命の木」があり、賢治さんの「樺の木」を「生命の木」とすれば鳥は天と地、すなわちあの世とこの世の仲立ちをする象徴ということになるといいます。

ともかく「一念三千論」から言えば、生命は刹那、刹那で「地獄」「餓鬼」「畜生」「修羅」「人」「天」「声聞」「縁覚」「菩薩」「仏」の十界を《互具》した「十界互具」として駆けめぐり、「百界千如」「一念三千世間」という生命状態を巡り回り、一瞬として止まっていない。その生命

は「縁」によって現れるといひます。

「土神」は朝気分がよく、今日はミミズのかわりに死んでもいい」と言い、平かな「人界」とも言える生命状態から、狐の意地を張ったように肩をいかせた姿に、むらむらと怒りの「修羅界」の生命が出て狐をねじり殺し4、5回踏みつけ、その後狐の住いとレインコートのかくしを見て大泣きをした。その生命は後悔、悲しみ、そして自分を責める「地獄界」とも言える状態を書いていきます。天から一転して地への生命の変化相を見事に表している。

面白いことは、「神」の生命も十界の範疇であること、神のよ

うな能力は使い方で大変なことを起こすことが考えられます。賢治さんは自分自身を「修羅」と言っていることの自戒を述べたのかとも思いました。

（姉齒 武司 記）

賢治と音楽の会便り

◎ 今回は賢治さんが聴いたという記録は見つかりませんが、賢治さんが聴いていたらどんな感想を持ったのだろうか、という観点でブルックナーを聴いてみることにしました。ブルックナーは長大な曲が多く、聴く方も余りなれていない点がありますが、トライしてみることになりました。そのなかでもポピュラーな交響曲第4番「ロマンティック」を聴くことにしました。

この曲はブルックナーらしさ溢れる、純粹さ、清らかさ、恍惚、無我等を表すとされる曲です。ブルックナーの標題によると「中世の騎士物語」を表していると考え、特に第1楽章のホルンの響きと弦のトレモロは、俗に「原始霧」といわれるブルックナー開始といわれる部分で、城門から馬に乗った騎士が乗り出で深い森の中に分け入り、その森の静けさ、鳥のさえずりが聞こえ、しばらくすると遠くから雷鳴が聞こえ、森に風が訪れ、そして過ぎ行き、また元の静けさに戻るといふ状況が表される。同様に、第2楽章は悲しみの挽歌を歌い、第3楽章は喜びの農夫の踊り、第4楽章

はこの交響曲の主題が過ぎ、とけあい、結ばれる姿を表していると考え、ワグネル的な中世風で壮大な溢れる交響曲です。

きつと賢治さんが聴いていればその壮大さや純粹性、清らかさに打たれ、心から感動したのではないかと、そしてさらにその感動はまた作品に現れていたに違いはないと思います。

◎ 賢治さんがよく聴いていたというスメタナの「モルダウ」をリクエストされ聴きました。

「モルダウ」はスメタナの代表曲です。交響詩「わが祖国」は6曲で構成されていますが、この曲はその中の2番目の曲です。この曲は非常に好まれ、それだけが独立して演奏されることが多い曲です。「モルダウ」は現地語ではヴルタヴァ河を言い、この川の流れを通し源流の小さな小川の流れから一本の川の流れになり、その流れは森のそばを過ぎ、そこでは狩猟のラッパの音が聞こえ、また牧場や畑を通り、結婚式での歓声や踊りがあり、夜半には月光が水面にキラキラ輝き、そして急流をすぎ、川幅も広くなり城跡の影を映し、大都プラハを通り過ぎて行く大河の姿を現している叙事詩風の曲です。

また、スメタナと並ぶチェコ

の2大作曲家ドボルザークの曲を聴きました。ドボルザークは「新世界」が有名ですが、今回は「チェロ協奏曲」を聴きました。ドボルザークの「チェロ・コンチェルト」は、チャイコフスキーの「ピアノ・コンチェルト」、メンデルスゾーンの「ヴァイオリン・コンチェルト」の3曲を「3大コン」とも言いいますが、それは各作曲者のそれぞれのコンチェルトの中でも更に代表すると言われる曲のことです。いわゆるドボルザークのチェロ協奏曲は、各作曲者のチェロ協奏曲中でも名曲中の名曲と言われています。

アメリカでの生活から得た黒人霊歌や民族音楽、古里ボヘミヤの民謡が溶け合った名曲です。また、最後にスメタナの作曲した「売られた花嫁」から「道化師の踊り」を聴きました。

◎ どちらかと言えば「音楽を聴く会」では交響曲が多く聴かれて来ましたが、参加者からピアノ曲の提供を受けましたので、その内からベートーヴェンのピアノ・ソナタの第8番《悲愴》、第14番《月光》、第21番《熱情》の3曲を聴きました。それぞれ初期、中期の傑作と言われており、賢治さんもよく聴いていた曲で、中でも《月光》は好んで聴いていたようです。賢治



さんは大正10年12月から郡立稗貫農学校（後、大正12年4月、岩手県立花巻農学校になる）教諭になり大正15年（昭和元年）3月花巻農学校を依願退職するまでは、一番レコードを購入した時期であり、また聴いたレコード曲の記録が明確にある時期です。有名なエピソードで、花巻のレコード店の売り上げが高く表彰を受け、どうしてか調べたと賢治さんの購入だったと言います。また、演奏はヴィルヘルム・バックハウスでスケールが大きく質実剛健な演奏で、ベートーヴェンの名演奏家と言われておりました。

◎ マーラーもブルックナーに劣らず長大な曲が多い作曲家です。今回はマーラーの第1番を

聴くことにしました。マーラーは1911年に亡くなりましたが、そのとき「50年したら私の音楽を理解するだろう。」と語ったと言われています。確かに1960年代から聴かれはじめ、そのまた50年後の2010年代の現代良く演奏されるようになりしました。数度に渡りマーラーのツイクルスをしている指揮者のエリアフ・インバルは本年、来年にかけ再び日本で東京都交響楽団と行なうそうです。そのインバルは「マーラーの曲には希望と樂觀、変容、神や天上の世界への信仰、そして死とたたかい、それを受け容れること等：：人生のすべてが表現されている。」とまた「第2次世界大戦の悲劇、原爆の悲惨、そして今日もお世界はさまざまな脅威にさらされ、自然災害、宗教的な問題、そして日本でも福島で起こっていること：：それらすべてマーラーの曲に表現されています。」と語っております。

確かに、例えば有名なベートーヴェンの言葉といわれる「苦悩を経て歓喜に至る」的な、直線の上昇を目指す時代と現代的な死、不安、危機、そして安心、安全等が縋(な)い交ぜになっている現代。マーラー自身がウィーン・フィルの名指揮者であり、作曲家、また美しい妻もあり、一面何不自由ない状態でありながら、自身の死の恐怖、妻への不安、子供の死の恐怖等安心と不安、幸と不幸がない交ぜになっている状態が全曲の底流にあり、これこそ現代の世情であると思われる、我々の共感を得る所かもしれません。突然の東日本大震災そして大津波。今後の東海、東南海、南海大地震と大津波の不安。また日本やEU、中国、アメリカと世界経済の不安定化。尖閣諸島、竹島問題の推移。一面足りていながら不足を感じる時代。安定の中にも不安定な時代。また何処にも出口が見えない時代。その様な時代の予見をマーラーは感じそれを曲にしたのではないかと思われまます。賢治さんの時代も大地震や第1次世界大戦また第2次世界大戦の予感があり、マーラーの曲を聴いていたらなんと言っていたかと思えました。救いはインバルが第4楽章の最後を「希望の勝利」と表現しているように、明るく全力で輝かしい演奏で終えている点です。

(姉 蘭 武司 記)

今回、「賢治と音楽を楽しむ会」参加者の簡単な、代表的な声をまとめてみました。

■長谷川 静子

「マーラーの交響曲第1番を聴き、特に第3楽章では岩にぶつかり、ただ跳ね返される様な気持ちでした。最終楽章はその中で希望を見出し、諦めず、朗らかさを持ち、1点の光をたよりに大きく立ち上がる……そんな気持ちでゆっくり全楽章を聴かせて頂きました。私自身、人生の山野を越えた幾年月ですが、それを感じさせる様な音楽でした。」

■佐々木 典子

「クラシックをゆっくり自宅で聴くことも無い日常をすごしておりましたが、この様な機会が無ければその日常のなかで知らずに居ったかと思えます。このようなゆつくりとしたひとときを過ごせ、ありがとうございました。」

■村田 光男

「ベートーヴェンのピアノソナタ3曲をまとめて初めて聴きました。これらの曲を賢治さんはどんな会場で、どんな思いで聴いたのか。賢治さんの心を思うとき賢治さんに近づく様な思いになれ、本当に素晴らしいひとときを感じます。ありがとうございました。」

■和田 康逸

「日常の忙しさの中で、おだやかで贅沢なひとときを過ごさせ

頂きました。ピアノソナタ「熱情」はゆれ動く心の有様を曲にのせるものでしたし、「月光」は生徒動員の直前に弾いておきたいという話を思い起こしながら拝聴しました。再聴したいと思いました。」

■植原 幹雄

「ベートーヴェンのピアノソナタ「悲愴」「月光」「熱情」をバックハウスの演奏で、それもボーズのスピーカーで聴くことが出来、大変素晴らしいひとときでした。賢治さんの思いをのせて堪能しました。」

宮澤賢治センター今後の定例研究会の予定

- 12月14日(金) 話題提供者：澤口たまみ氏(エッセイスト)
話 題：宮澤賢治の共感力―幼少年期と自然体験―
- 2月19日(火) 話題提供者：山本昭彦氏(岩手大学人文社会科学部教授)
話 題：風の又三郎と赤いうちわ
- 3月7日(木) 話題提供者：松元季久代氏(岩手大学非常勤講師)
話 題：宮澤賢治の平和への悲願
―『グスコブドリの伝記』と肉弾三勇士の時代―

*いずれも17時～18時、参加費無料、会場は岩手大学農学部1号館2階第一会議室
1月はお休みです。都合により、日程や話題が変更になる場合があります。
詳細は宮澤賢治センター(電話 019-621-6672)にお問い合わせください。



宮澤賢治記念短歌会報告

会員 田村 依江

猛暑日の多かった夏も過ぎ、急に秋めいてまいりました。6・7・9・10月の賢治短歌会の報告をします。

6月11日、台湾の一流の詩人の方々が岩手沿岸の被災地を見学なさり、私も同行させていただきました。駅舎の無くなった鶴住居、釜石の奇跡と言われた避難路、大槌では役場の損壊、碑の大巾な移動、波の力の強さをまざまざと目の当たりに拝見致し、避難できた人、亡くなった方と人間の命を感じました。帰りのバスでは、望月先生の「津・津・津波」の短歌の力強いお声でのご披露もありました。夜の交流会では、台湾には「朗読文化」というものも在るというお話が、台湾の方からあったそうです。

例会では望月先生から賢治の文語詩ノートのメモや、日記は残していないという賢治の短歌の歌稿A（妹トシさんが書いたもの）や、苺畑の柘植先生のコピー等を戴き、賢治の数少ない、又時期の短い短歌の作品に触れさせていただきました。九月には「鹿踊りのはじまり」の抜粋を読み合いました。望月先生が賢治の短歌を考える時に1、賢治の短歌はすべての作品の中にある
2、それが書かれた時期からも

考えられる

3、書き表し方も一行書きとは限らない

4、使う言葉の範囲も固定されていない

等のお考えを伺いました。

10月例会では「ちやがちやがうまこ」の歌で、全員がそれぞれ一首を選び、感想を話しました。先生から、この歌の特徴として、1、方言の使用、2、歌稿Bは選んだのは賢治自身であること、3、初め4行書きだったのが、大正6年の「アザリア」では2行書きになっていたこと、4、短歌の読まれた年代がはつきりしない事等をお伺いしました。

次に6月からお仲間が一人増えた会員の短歌を紹介します。

6月・10月までの短歌4首

姉齒武司

・歌会の披露会員披露せし
雅びにひびき短歌（うた）
古へに

・轟々とハングの下を通る
バスその空の上飛行機雲が
・黄金の稲穂お辞儀す田圃
道日差し強くも風秋の香す
・ギンドロも葉を落とすと
き八幡平全山紅葉歓声聞こ
ゆ

阿部真紀子

・出た！あれだ！稲妻孕む
あの雲だ「豪雨予報」の
ころは此処だ
・見慣ればイジメもアンビ
も同じだと違いを見分ける
心と目がな
・三十五度焼酎の度数と同じ
ならロックにしたいきょうの
空気
・水無くてひな鳥連れた鴨
が行く川の真ん中茂みも枯
れて

北田まゆみ

・二人いて二人のいない時
を恋う一人の夜はジャスミ
ン茶飲む
・後ろから風ふうわりと捲
きつかれ ほんの一瞬あな
たに抱かれた
・割り箸に付いたキャン
ディ舐めていた昭和の夏は
あなたの匂いす
・母の日に贈（もら）いし
日傘たたみおり初秋のひか
り浴びて歩こう

小菅アイ

・津波にて駅舎流れ夏草
に埋もれしホーム潮風渡る
・風を背に破壊されたるビ
ルの前摘み草つみて黙禱を
せり
・喉乾きペットボトルの蓋
取れず患ふ左手人の世話受
く
・開け放つ三尺ほどの欄間
より満月見えてねむりたの
しむ

昆 明男

・ハイボール角にかざると
君が言うなんでもいいよ
ソーダのプッシュ
・本町のビールの店の打ち
上げで日本酒乞えば無いと
答えた
・芝居書き上演するのは
いいけれどチケット販売
ちよつと疲れる
・青空にかなしき雲を描き
たくてクレヨン買い来て白
くぬりたり

田村依江

・曲水に流してつなぐ歌人
の短歌（うた）を伝うる読
み人の節
・積み置きし紙の山崩れる
音聞こゆ心あるかにリズム
つくりて
・一晚中鳴きて止まない虫
達よいつか私も草叢の中
・田は黄色空晴れ渡り秋来
たる案じた秋の豊かなみの
り

佐藤静子

・津波より逃れむと上る階
段と聞きし階段幾重にも曲
がる
・役場前広場にペニニア植
えられて日常少したぐり寄
せてる
・優しさは測れないけど五
段階なればあなたはあまけ
で三か
・この道を歩くも小（ち）
さき旅なりきゆるりゆるり
と秋の陽連れて

長谷川静子

・朝夢に呼ばれし声に胸踊
り窓を開ければ小雨もたの
し
・深き露日の出輝（ひかり）
に動きだし湖のさざなみは
濃きまりもいろ
・巨大樹は神とまつられ浄
土後は像となり立ち世を守
りある
・児童らの四角い箱は木の
にはい折り重ねられ天使の
鶴に

望月善次

・匂い立つような伝統香り立
つようなりりしさに背筋は
伸びて
・鮮やかな坂道下る自転車
の風切るような昼過ぎであ
る
・余りにも分かるそれ故惑
いつつ返す言葉を捜してし
まう
・啄木の書は上手いのか下
手なのか誰か教えてくださ
いちよつと

吉田直美

・青い花それも小さく揺れ
る花私は好きだと今日気が
ついた
・やはりまだ好きなんだこ
のスポーツを全米オープン
ずつと見ている
・正座して猫が一匹まっす
ぐにこちらを見てるはるか
向こうで
・傷を負い痛みを抱え持つ
如く痩せ尾根鋭い秋の岩手
山（やま）見る

特別寄稿

小岩井農場にて(二〇一二年夏)

青山学院大学経営学部教授 佐藤 亨

この夏、はじめて小岩井農場に行った。わたしは岩手の一関で生まれ、高校まですごしたので、もしかしたら一度くらいは行ったことがあるかもしれない。しかし、思い出そうとしても、その記憶はない。そもそも盛岡自体、あまり行かなかった。出身地一関は県南にあり、伊達藩に属し、南部藩の盛岡とは境界をはさんでいたからなのだろうか。その代わり、仙台にはよく行った。とはいえ不思議なもので、いまは盛岡のほうに気が向く。

盛岡は新鮮であった。上の橋あたりを散策したが、むかしの人馬の往来を感じさせるような道や街並みが残っていて、古都のような風情だった。そして人がおだやかであった。同じ岩手でも一関とはちがうと感じる(一関の人はせっかちな気がする)、同時に、自分は岩手の生まれなのに地元のことを知らないと感じた。盛岡以北で行ったのは久慈くらいである。遠野も一度行ったきりである。ただし『遠野物語』の故郷としては訪ねたことがなく、かっぱ淵や

早池峰山もこれからである。故郷はいぜん異郷である。

さて、小岩井農場である。広大な土地。高い空。古い牧舎。この風景は里と山から成る日本の田舎の風景からはほど遠い。

「新開地」と宮澤賢治は言う。この農場は、たとえば『遠野物語』でオシラサマの起源として語られる、馬を愛したあまり父親に馬を殺され、その馬の頭とともに昇天した少女の話(馬娘婚姻譚)などにある母屋と馬屋が一体となった南部の曲り家とは雰囲気まるでちがう。家畜ではなく酪農の風景が広がっている。

わたしは賢治の詩、「小岩井農場」に引かれて現地を訪ねた。あらためて原詩を読み返すと、賢治自身も、異国にでも行くようにわくわくしながらこの風景に入ってしまったのがわかる。「わたくしはずるぶるすばやく汽車からおりた／そのために雲がざらつとひかつたくらゐだ」という書き出しからも、ここがはやる様子が読み取れる(賢治の詩はすべて吉田文憲編『宮沢賢治詩集』ハルキ文庫、

1998年より引用)。

賢治は「オリーブのせびろ」を着た紳士らと駅待合室から馬車で農場に向かう。背広だけでなく馬車も異国風である。「黒塗りのすてきな馬車」は「光沢消し」で「馬も上等のハツクニー」とつづく。やがて小岩井農場が見えてくる。

すみやかなすみやかな万法流転ばんぽうりゅうてんのなかに
小岩井のきれいな野はらや牧場の標本が
いかにも確かに継起けいきするといふことが
どんなに新鮮な奇蹟だらう

いったいこのことばつかいはなんだろう。詩らしくない。

「万法流転」とか「継起」とか、經典や論文にでも出てきそうなことばがつかわれている。しかし、全体的にしなやかだ。抒情的ではないが、感情がこもっている。それでいて、終始、分析的だ。「すみやかなすみやかな万法流転ばんぽうりゅうてんのなかに」もいいが、「いかにも確かに継起けいきする」といふことがという一行は独特な響きを持っている。「わたくし」といふ現象は／仮定された有機交流電燈の／ひとつの青い照明です」と自己定義した賢治一流のことばつかいではないか。通



常、対概念とみなされる「詩」と「科学」が融合しているのである。

賢治にとって小岩井農場とはなんなのだろう。小学校の校舎にきまつてある化学実験室のようなものか? 「学問」や「西洋」が具現化され、他の教室とは一線を画す独立した空間。生活臭のない、澄んだ空間で賢治は自己を見出すのではないだろうか。彼が生まれ育った岩手は凶作や貧困に苦しみ、そのなかで賢治は農業技術者として生きた。しかし、一方で土地にしばられない、この世の苦しみという重力から自由な賢治がいる。揮発性の高い空気が漂い、心身を浮遊

することができ空間——それが小岩井農場なのだろう。

引用した四行を刻んだ詩碑が農場の一角にある。わたしは思わず足を止め、詩行を口ずさんだ。隣には解説があり、若き日の賢治が農場を好きでよく訪れたとある。詩については、「季節の循環を踏まえ、万物の生命が明滅するなかで、小岩井農場の姿がつぎつぎと更新していくさまに力を得、賢治が『あたしはげます契機となりました』とある。小岩井農場はひとつの独立した有機体であるかのようだ。賢治の読者にとって、農場がいまなお生を更新していることはうれしいことだ。

富岡多恵子は「手帳と暖簾」という賢治論(『さまざまなうた——詩人と詩』所収、文藝春秋、一九七九年)で、「雨二モマケズ」という、賢治がもとものと「手帳」に書いたことばは「詩作品」というより「お経」であり(「詩の原初は、祈りであった」と富岡は言う)、その「お経」が「暖簾」に印刷され、みやげものの屋に売っていることは「お経」本来の姿ではないかと言う——「賢治の祈りが、校本全集のごとき専門家の見るもののにのみとどめられるのではなく、ひとの顔を拭く手拭いや、台所につ

るされるの、いんになることは、結果として布教のひとつのかたちをあらわしているといえないだろうか。

「小岩井農場」の一節は「お経」ではなく詩なのだろう。それでも、この一節もまた「詩作品」が持つ重さからまぬかれてるように思う。詩碑に刻まれた賢治のことばはいまなおあたらしい。そして、農場に息づいている。だから旅人は思わず口ずさんでしまう。

賢治は岩手をイーハートブと呼んだが、イーハートブこそ賢治の新開地だったのではないか。わたしの故郷／異郷の旅——今度は遠野を訪れようと思っている。



エッセイ

啄木・賢治と英語好き

岩手大学教育総合センター

佐藤 竜一

啄木と賢治には、英語好きという共通点もあった。

啄木は盛岡中学三年のとき、クラスメートの阿部修一郎・伊東圭一郎・小沢恒一・小野弘吉らと英語の自主学習会を結成した。

このときに使用したテキストがユニオン・リーダーだったため、会はユニオン会と名づけられた。英語の話題だけではなく、社会情勢や文学についても語り合った。

そのこともあり、啄木は英語にかなり習熟したようだ。

盛岡中学を中退した啄木は明治35（1902）年10月31日に上京し、四か月ほどを東京で過ごす。

図書館へ行き、本を貪り読んだ啄木だが、その中には英語の本もあった。

日本橋の洋書専門店丸善も啄木のお気に入りの場所で、入り浸った。丸善には多くの洋書が並べられていて、英語にとりつかれた青年たちが集まっていた。啄木はシェークスピアなどを買って読んだ。

迎えに来た父親の一楨と

もに帰郷する際も丸善に立ち寄り、C・A・リッジの『Wagner』を2円35銭で購入している。

東京での生活で心身の健康を損ねた啄木は、しばらく実家である宝徳寺の一室でドイツの作曲家・リヒャルト・ワグナーの研究に没頭した。

評論家の姉崎嘲風から紹介され、文芸雑誌『太陽』で読んだワグネルの思想に触れて以来、啄木はワグナー（ワグネル）に大きな関心を払うようになっていた。

研究の成果は明治36（1903）年5月31日から6月10日にかけて7回にわたって『岩手日報』に連載された「ワグネルの思想」に結実した。

啄木は明治39（1906）年4月11日、故郷にある洪民尋常高等小学校の代用教員になった。

啄木の受け持ちは尋常科二年生だったが、課外授業として高等科生徒のため放課後に英語を教えたことは画期的で、その方法は現在中等教育で行われている方法より進んでいた直接教授

法、口頭教授法に近いものだったという（近藤典彦『啄木六の予言』、ネスコ刊）。

賢治は大正10（1921）年12月、稗貫郡立稗貫農学校（後に岩手県立花巻農学校に昇格）の教諭となった。

同僚の白藤慈秀によれば、賢治の受け持ちは代数、農芸化学、土壌のほか、英語も教えた。賢治の一番の得意は英語のようだった、と白藤は述懐している（森莊巳池『ふれあいの人々 宮澤賢治』、熊谷印刷出版部刊）。

実際賢治は英語が堪能で、原書も数多く読んでいた。

大正7（1918）年6月6日、父政次郎宛の手紙には丸善が登場している。賢治は盛岡高等農林学校（現岩手大学農学部）卒業後、岩石学を学んだ恩師関豊太郎から依頼され研究生として残っていた。

稗貫郡の土性地質調査に取りかかりはじめたばかりだったが、賢治は丸善から洋書を取り寄せて専門の勉強に余念がなかった。

その手紙には、賢治はデナ著『鉱物学教科書』、ハアカ著『学生用岩石学』、オストワルド原著『フインドレイ英訳』『無機化学原理』、フインドレイ著『相律及ソノ応用』を入手した

喜びがあふれている。ほしかった二冊の本は在庫がなく、海外から着荷次第連絡してくれるよう丸善に依頼している。

むさぶるように海外の専門書を読み、専門知識を吸収している賢治だった。

この時点ですでに三度上京している賢治だが、啄木と同様日本橋の丸善にはよく出かけたに違いない。

現在も書店として健在な丸善は、明治2（1869）年、福沢諭吉に師事した早矢仕有のが貿易振興を目的に、丸屋商社を横浜に創立したのが発祥である。

翌年には日本橋に支店を開設（後に本店となる）し、以後全国各地に支店網を開いた。そのかたわら出版業にも手を染め、『新体詩抄』や『百科全書』などを刊行した。

丸善の「丸」は地球を象徴しているというが、啄木や賢治が生きた時代は西洋文化普及の窓口として親しまれた。

賢治が自費出版した詩集『春と修羅』に使用した原稿用紙には、「丸善特製」の文字が残っている。

おそらく賢治は、万年筆やインクなども丸善を通して入手したと推測される。

会
員
投
稿岩手を愛するプロフェッ
ショナル・宮澤賢治

岩手大学農学部

佐藤 一磨

さて、私は岩手大学に入学して7か月になります。賢治センターの存在は入学前から把握しており、4月に早々入会いたしました。ところが私の不真面目により、まだ出席しておらぬことは、最初にセンター会員の皆様にお詫びしなければならぬことであります。こんな不真面目な私が寄稿させていただいたのは、岩大教育総合センターの佐藤竜一先生のお言葉があったおかげでした。実は、本年度6月より私は先生にエスペラントを教わっているのです（エスペラントというのは宮澤賢治とかかわりの深い国際語です。使用者は世界に100万人以上おり、世界一習得しやすい言語と言われています。只今一緒に学んでくれる知的好奇心旺盛な人を募っています！）。学生の若い感性を主体とした文章をということでしたが、自分は作文があまり得意ではありませんから、

みなさんは適当に、程よく読んでいただきたいと思います。

宮澤賢治は日本中、世界も含めて、たくさんの方ファンを持っていますよね。何故賢治はそれほど人を引き付けるのでしょうか？ それは彼がたくさんの顔を持つていたからだと思うのです。賢治は童話作家であり、科学者であり、敬虔な仏教徒であり、先生であり、サラリーマンであり、……等々。だから多くの人の心のどこかに、（確率的な観点から）必ずぐっとひっかかるものがあるのではないのでしょうか。ですから、賢治に対してのもつ感想は、みんな違って、みんないいのです。

私から見ると賢治は、あまりに遠いものであるように思えます。彼の生きた時代から100年も経っていますから、私の見る盛岡と賢治のいた盛岡とはかけ離れたものでしょうし、生活習慣や考え方もかなり変わってしまったことでしょう。私としては、賢治は先輩というより先人という感じですが、岩手大学生として、賢治を我々の世代から遠ざけてしまうことは実にナセンSNSなことですよ。私たちの時代がどうあろうとも、賢治が高等農林を卒業したことは事実ですし、賢治は岩大のある限り、いつまでも誇るべき先輩

であり続けるでしょう。

ところで、賢治は高等農林時代、どんな学生だったのでしょうか。当時中学より上の学校、つまり今の大学に当たるものは、帝国大学、高等専門学校、師範学校、陸海軍士官学校などごくわずかなものでした。現在のうちに5割の高卒が進学するなどという状況は夢のような話で、専門の学問を修める道は少数の知的エリートに限られておりました。そんな中で、賢治は盛岡高等農林学校に首席で進学します。彼がいかに優秀であったかを示す分かりやすいお話です。入学後は、小菅健吉・保阪嘉内・河本義行とともに、同人誌「アザリア」を創刊するなどの積極的な文芸活動を行っていました。これは竜一先生のお話ですが、賢治はこの保阪嘉内には頭が上がらなかったとのこと。友達の中でも、こいつの上手は取れないっていう人が、必ずいるものです。保阪とはきつとこういう人だったのでしょうか。賢治の人間らしいエピソードです。また、幼少より不安定な健康状態であった賢治ですが、高等農林時代もその例外ではありませんでした。肋膜炎を患い、医師の診断を受けた後、河本義行に「自分の命もあと15年はあるまい」と言ったとされています。

自分の命が長くないことを知りながら学生生活を送っていた賢治。その上、高等農林の当時貴重なことをかんがみれば、彼にとつての大学生活？は我々の何倍も尊く愛おしいものであったことでしょう。ですから、賢治は盛岡での学生時代に見たもの、聞いたものをいくどとなく小説や詩に登場させています。賢治の想像力は、主に花巻にいた子供時代に形成されたものと言われています。しかし盛岡での生活も、それに負けず劣らず素敵なものであったことに違いありません。盛岡に住む人々の気さくな性質や、情緒あふれる豊かな自然、先進的なハイカラ建築物などに触れ、たくさんの幸せを感じたことでしょう。賢治は後に、「反岩手・賛東京」とでもいうべき考えに一度突っ走ることになります（賢治は東京に対して強いあこがれを持っていました）が、そんな賢治を再び岩手に立ち返らせたもの、すなわち故郷のあたたかさというものが、盛岡高等農林時代を通じて賢治の身体の中にしみついていったのではないのでしょうか。このように病弱な体と常に隣り合わせにありながら、大きな軌跡を残した大先輩、宮澤賢治。私たち岩手大学生は、彼をどのように見て、どのように理

解すれば良いのでしょうか。これも人それぞれであって良いというのが正解です。ですがここで、私なりの考えを書かせていただきます。私は、我々が賢治を理解するには、何故賢治がこの岩手、盛岡を愛し、そして何故詩や童話に残したのかを考えることが一番大切であると思います。宮澤賢治という人は、今や日本中、部分的には世界にも知られていますが、これは実際不思議なことですよ。日本の一地方に過ぎぬ岩手県を舞台にした、しかも童話が、これほどまでに彼を有名にするとは、普通では信じられないことです。逆に考えると、それだけこの岩手県は、普遍的、美的なインスピレーションを賢治に与えたということではないでしょうか。では具体的に、そのインスピレーションとは何なのか？ これを探すが、我々学生に必要なことだと思います。

この話を、少し別の視点から見えてみましょう。現在、岩手県は震災復興に全力をあげて取り組んでいます。最近、日本の元気づけには愛国心が必要だという理論を聞きますが、震災復興にもこの理論が必要で、復興に携わる者は、岩手を愛し、岩手を救おうとする心の強いものでなければなりません。復興には

長年の期間を要し、いずれ我々の世代が復興の中樞を担う時がくるでしょう。私たち岩大生がいつか岩手の復興に携わることになったとき、岩手に対してまったく無知で、無関心であることは許されません。

ですがここに、岩手を愛する、最高のプロフェッショナル・宮澤賢治が、先輩としているではありませんか。賢治がどうして岩手を愛したかを知ることとは、岩手そのものを知ることにつながります。その知識が、震災復興の原動力になるのではないか。

岩手大学の大先輩、宮澤賢治。彼は岩手のすばらしさを日本中に知らしめた英雄です。そんな大先輩が発見し描いた岩手の美しさを、岩大生が知的に理解していくことが求められるでしょう。そしてこれこそが、岩手を救う大きなエネルギーとなると信じて止みません。

「宮澤賢治と社会思想」

―宮澤賢治センター通信―

第15号を読んで

宮城県涌谷町在住

伊藤 源治

ながい間、宮澤賢治の文学を読み、宗教（日蓮宗）の布教活

動を中心とする社会的活動を辿ってきましたが、その社会思想に「何か危ういもの」を感じて来ました。

かれの文学、社会的行動と社会思想の延長戦上には何があるのだろうか？と考え、いつも疑問に思っていたのです。

岡崎正道教授が「宮澤賢治と帝国日本―賢治の思想に着目して―」で主張したとおり、結局は「超国家主義」に行き着くのではないかと思います。

賢治の思想遍歴―宮澤賢治の思想は仏教Ⅱ生家の浄土真宗、日蓮宗から、キリスト教、農本主義、そして、エスペラント（言語）も思想の一つ）と近代日本思想の軌道と同じ遍歴をしましたが、やはり根本は「法華経」から出発している日蓮宗です。

かれの生家宮澤家では父・政次郎の浄土真宗と子・賢治の日蓮宗、その激しい対立ですが、なんとという宿命でしょう。

ありました、父子の宗教対立、アンドレ・ジイドの「田園交響楽」にも。

かれ自身も、「法華経」を信じ、日蓮宗の在家団体「国柱会」に入会、浄土真宗の父と対立して、家出までして布教活動をしました。人生の後半は布教から離れたとはいえ18歳で「国訳妙法蓮華経」を読んで以来、死ぬ

まで心の奥には法華経と日蓮宗が「伏流水」のように流れていたことは間違いありません。

かれが死に臨んで父に自身の死後「国訳妙法蓮華経」千部を用意して、人々に配るように遺言したことを思えば理解出来ます。しかし、不幸なことに、国柱会が日本が朝鮮半島、中国などアジア諸国を植民地支配下に置くことを積極的に支持し、その侵略の精神的支柱を果していたことは紛れもない事実です。

賢治の政治と経済の思想―賢治は優れた芸術的感性と言語、自然科学的思考の持ち主ですが、社会にも「眼」は開かれていました。しかし社会科学の知識はほとんど持ち合わせておらず、あの時代の権力者、宗教指導者、軍部、巨大資本に対して批判の言葉を持つこともなかったと思います。かれが生きた時代、大正デモクラシーの盛り上がり、労働運動、多様な社会思想が渦巻き、その下で政府が治安維持法を成立させて特別高等警察を組織した意図、軍部の行動の意味は読めませんでした。

日本国内の宗教状況、すなわち仏教各派、新興宗教、そして何より神道の動き、政治は軍部に牛耳られて既に議会は機能しなくなっていたのです。そして、植民地の経済支配を

目論む巨大資本、それに絡む大小の利害組織の数々…この時代の流れをかれは理解出来るはずもあります。

かれの政治状況判断、歴史の認識ではあの大正デモクラシー後、1930年代から1945年までの「帝国日本」のファシズム高揚の時代を思想的に（冷静）に乗り切ることは難しかったと思います。かれが花巻農学校教諭のとき生徒たちに「役所なんか勤めるな、農民になれ」と説いています。

しかし、当時すでに、岩手県花巻地方でも小作制Ⅱ地主制が成立し、多くの農民が農業だけで生活するのは難しく、生徒たちの家庭は経済的に厳しい生活を強いられるのが現実でした。さらに岩手県の農民の前には「農業恐慌」が迫っており農村はまさに疲弊しつつあったのです。それでも、「桑つこ大学」

花巻農学校に入る生徒たちの家庭は恵まれている方だったと思います。それにも拘らず、当時、岩手県、宮城県など東北地方で多発していた小作争議などが「意味ある重要な社会問題」としてかれの眼には映っていたように見えます。農民の多くの家庭にとって農学校で学んだ子供を安定した職業に就かせ、現金収入を得ることが確実な生

活の方法だったのに…。

かれも農学校を退職して農業をしました。が、豊かな経済力を誇る父・政次郎の「掌の上」でこのことで、実際に農業で生計を立てていた訳ではないのです。賢治の経済思想で実生活を生き延びるのは難しい。

自らは安全な立場に身を置き、その「意図」はなくとも農民の子供たちに経済的に厳しい生活苦を強いる言葉を発したことになりました。生家・宮澤家は自らも手伝った古着屋、質屋：「宮澤商会」は農民の経済生活がどんなものであるか、一番見える職業であったのに…。これは個人の「理想」「思い」と現実の社会状況の大きな乖離に気付かず、農村経済の状況判断たるや…実に怪しいものです。

また、かれの眼前に展開する、農村疲弊の救済にも1人で1つの農業技術、「肥料設計」のみで「細々」と立ち向かうほかの術を知らず、行政の農業政策のあり方や農業の組織化などの考えには及ばなかった。

「世界が全体幸せにならないければ個人の幸せはあり得ない」とその思いは理解できますが、結局、在野の一技術者で、社会的視野が狭く「技術は社会的存在」であることに全く気付いていませんでした。

賢治の歴史的な評価―宮澤賢治は良いときに死にました。芸術家、思想家、政治家には「社会的、歴史的な死に時」があります。

みじかい芸術家の生涯は、あの不幸な日本ファシズムの絶頂期に重なることはなく、「ファシスト」にはならず晩節を大きく汚さずに済みました。

当時としても若年の「死」でしたが、結果として後世の歴史検証のリトマス試験紙に曝されずに済み、幸いだったと思います。賢治先生ごめんなさい。

世界的な評価―近年、賢治の文学は外国でも大きな支持を得ていますが、個人的な支持者はともかく、政治家はもちろん、科学者、教育者、そして芸術家の社会性を重視し、歴史の中に思想と行動を位置付け検証しようとする研究者の多い国はどうでしょう。特に、アジア諸国では受け入れられることは難しいのではないかと。今後、このような国々での賢治研究が深まれば評価は変わると考えています。



イベント案内

「賢治さんの大好きな『田園交響曲』が響く」

北海道農民管弦楽団
事務局長 助乗慎一

この度、当団の演奏会を賢治のふるさと・花巻市で開催できることを団員一同大変楽しみにしております。また、開催にあたり岩手県内、花巻市内の関係者のご尽力に大いに感謝申し上げます。

2013年は賢治の没後80年の節目であります。そして、大震災後にアジア各国の支援で誕生した「金星少年少女オーケストラ」の若いメンバーと共に未来への音色を一緒に奏でます。このオーケストラは、『セロ弾きのゴーシュ』の主人公・ゴーシュの所属していた「金星音楽団」から命名されています。北海道農民管弦楽団と彼らでまさに、賢治の夢見た2つの楽団の共演ということなのです。

私たちは「鉄で大地を耕し、音楽で心を耕す」をモットーに宮沢賢治が『農民芸術概論綱

要』で述べた理想に基き、彼が果たしえなかった農民オーケストラを現代に蘇らせる試みでもあり、真の芸術とは何かを追求する志高い楽団です。1994年に産声を上げ再来年20周年を迎えます。これまでに北海道内では8管内15カ所、海外では昨年のデンマーク公演、国内で津軽海峡を越えるのは初めてのことで。

1月27日は、賢治の愛したベートーヴェンの交響曲第6番「田園」や、当団代表で指揮を務める牧野時夫による新作「宮沢賢治『星めぐりの歌』幻想曲」の日本初演を披露させていただきます。時節柄お忙しいとは存じますが、岩手県内外の賢治ファンの皆様始め、多くの方のご来場お待ちしております。どうぞ宜しくお願いします。

記

○北海道農民管弦楽団花巻公演 (第19回定期演奏会)

と き／2013年1月27日(日)

13:00開場 13:30開演

ところ／花巻市文化会館大ホール
(花巻市若葉町3丁目16―22
0198―24―6511)

主 催／北海道農民管弦楽団花巻演奏会実行委員会(実行委員長／林 正文)

共 催／花巻市、花巻市教育委

員会

後 援／花巻市文化団体連絡協議会、花巻農業協同組合(JAいわて花巻)、花巻商工会議所、花巻青年会議所、宮沢賢治記念館、宮沢賢治学会

イーハトーブセンター、(財)宮沢賢治記念会、宮沢賢治センター(岩手大学内)、(株)林風舎、岩手農科大学・岩手農村文化懇談会、岩手日報社、岩手日日新聞社、えふえむ花巻(FMONE)

入場料：一般1,000円、学生500円(小中高生)、親子ペア1,200円

指揮・牧野時夫(北海道農民管弦楽団代表、有機農園「えこふあーむ」主宰)、南紳一(金星少年少女オーケストラ指揮者、ぐんまJr.オーケストラ指揮者)

演奏・北海道農民管弦楽団(管弦楽)

共 演・金星少年少女オーケストラ(弦楽)、東北農民管弦楽団(管弦楽)

曲 目・ベートーヴェン／交響曲第6番「田園」

ボロディン／歌劇「イーゴリ公」より「ダッタン人の娘の踊り」

「ダッタン人の踊り」

牧野時夫／宮沢賢治「星めぐりの歌」による幻想曲「日本初演」他

お問い合わせ：事務局 助乗慎一
sukesan0716@gmail.com
090-3898-11476

チケット取扱：花巻市文化会館
0198-24-6511
正時堂
0198-23-3144
なはんプラザ
0198-22-4412
林風舎
0198-22-7010

ウ	ル	グ	アイ
だ	よ	り	2

岡田 幸助

ウルグアイに来てからちょうど半年になりました。こちらは春です。

皆さん、お変わりございませんか。先日、佐藤竜一事務局長より御船道子様が82歳で7月に逝去されたことを伺いました。御船道子さまのご冥福を心よりお祈りします。

御船道子様は賢治のアザリアの仲間、親友の一人である河本義行の次女であります。御船様とお知り合いになったのは岩手大学60周年記念行事の一つとして「アザリアの咲くとき」展を開催したのがきっかけでした。緑石（義行の雅号）の資料をお借りしたことにしてお礼状を出したところ、巻紙に毛筆で豆柿の絵を添えてご返事を頂いたのが最初でした。今でもそのお手紙を宝物のように保存しております。2009年6月1日の展覧会のオープニングセレモニーにお呼びしたところ、出発前に怪我をされて、お越しになれないところでしたが、お医者さんの許可を得たからという



御船道子さん 2009年9月
岩大植物園にて

ことで、盛岡まで急遽来て頂けたことは奇蹟に近いことでした。その年の9月に花巻の賢治祭に來られた時、岩手大学に寄つてくださり、河本義行が俳句に詠んでいるキササゲの樹や豆柿の木を案内しました。また月末には私が学会の帰りに倉吉に伺い、御船様がこれまで女将をしておられた三朝温泉の木屋旅館に泊めて頂きました。御船様は藍染めでも有名な方であり、のれんや畳の縁などあらゆるところに藍染めを使っておられ、旅館は別名「藍染めの館」とも言われるそうです。また「三朝温泉かじか蛙（がえる）保存研究会」の会長もされていて、カジカの自然保護のお話もしてくださいました。カジカガエルはどんな声で鳴くのですかとお聞きしたら、ケロケロ？と物まねをしてくださいました。ちょうど山に木を植える運動を進めてお

られるところでした。そのひたむきな生き方には大変励まされました。ご遺族のお悲しみはいかばかりかと思いますが、慰めをお祈りします。

さてカエルといえば私もウルグアイでカエルの研究をしています。ウルグアイのカエルもだんだん数が減って来て問題になっていきます。これは世界的な傾向で、貴重な種類のカエルが絶滅して環境保護の点から注目されています。カエルなんていなくなっても構わないと思うのは間違いで、食物連鎖や生態系の破壊で、農業問題、食糧問題に繋がるのです。カエルの減少の一つにツボカビ症という病気があります。そのツボカビ症がウルグアイにもあるということを担当研究室の大学院生が発見しました。私が着任してツボカビ症の他にまだ別の病気があるというのでその標本を顕微鏡で見せてもらいました。その結果、ある種の藻類（クロレラと似ているが葉緑素を持たない）が原因であるらしいということが判りました。現在、それを証明するために研究しています。

カエルを研究室で飼っています。食物はゴミムシダマシの幼虫で、ケージに放り込んでやると夜中に食べます。一日中ガラスにへばりついて動かないのです。すが、夜の間に活躍するのですね。

冬にもオタマジャクシがいることを知りました。冬にオタマジャクシがいるなんて不思議ですが、季節や環境により卵からカエルになるまでの長さも変わるのですね。暖かいときには数カ月ですが、長いものでは1年もかかるものもいるそうです。

次にアサードについてお話ししましょう。ウルグアイのお宅を呼ばれると、よくアサードをごちそうしてくださいます。ちよつとした家には屋外にアサード用の炉が設置されています。まず、薪を燃やして熾きを作り、その熾きを網の下に薄く広げます。そこでじっくりと焼くのです。日本だと炭の遠火で岩魚を焼くようなものですね。網の上に牛の胸のあばら肉を載せて、焼きます。その肉は巨大です。肋骨（リブ）を骨に対して垂直方向に10cmぐらいの幅で長さ50cmにわたり電気鋸で豪快に切り取った肉を載せます。肉屋では肋骨を何本も含んだまま連続して大胆に切りとった大きな帯状の肉塊が売られています。火を熾してから肉が焼けるまで2時間ぐらいかかるでしょう。その間おつまみの豆などを食べながらおしゃべりをします。焼けたらお皿に盛って室内



獣医学部 私の居室はこの建物の中です。

で頂きます。たれもソースもなしですが肉そのものが美味しいのです。肉の他、ソーセージや内臓なども一緒に焼いて食べます。血液の入ったソーセージもあります。

アサード好きのウルグアイ人は週末に知人を招待して夕方から夜遅くまでビールやワインを飲みながら楽しいひとときを過ごします。そういえばウルグアイはワインの種類が多く、おいしいです。私は安いワインしか知りませんが、それでも充分いけます。紙パック入りのワインもあります。タナという種類のブドウから作ったワインが名産です。スペインのバスク地方（自治州）が原産ですが、現在ではバスク以外では世界で唯一の生産地だそうです。

ではまたお便りします。

（宮澤賢治センター 理事）

国際シンポジウム

文学における〈喪〉、そして共同体の再構築

古代より、無数の文学作品が死者たちに捧げられ、鎮魂の祈りが共同体の（再）構築をうながしてきた。2011年3月11日の惨事以降ますます重要度を増している、こうした文学の機能を再確認するために、本シンポジウムではヨーロッパの文学作品に加えて、とくに宮澤賢治の作品を読み解いていく。

ボルドー第3大学のエリック・ブノワ教授、ヴァレリー・ユゴット准教授、そして日本全国から研究者が多数参加し、三日間にわたって発表と討論を行う。

12月21日(金)

日本現代詩歌文学館（北上）

13：30 講演1

エリック・ブノワ

通訳・中里まき子

灰の詩（うた）Le chant des cendres

14：30 講演2

ヴァレリー・ユゴット

通訳・寺本弘子

「何と私はあなたに呼びかけることか！」メードザンたち*の喪（アンリ・ミショー）

《Comme je vous appelle !》Le

deuil des Meïdosesms (Henri Michaux)

註・メードザンたちとはミショーが生み出した、土人形か地底人のような想像上のキャラクターを指す造語

12月22日(土)

岩手大学北桐ホール

13：00 開会の挨拶

中里まき子

13：15 基調講演1

エリック・ブノワ

通訳・中里まき子

言葉の石碑（文学と共同的な〈喪〉の作業）

Stèles de paroles (littérature et deuils collectifs)

14：45 休憩

15：00 セッション1

司会・山本昭彦

◇木村直弘 喪の視座としてのドッペルゲンガー—宮澤賢治「青森挽歌」をめぐって—

◇佐藤竜一 賢治のエスペラント体験と「ポラーノの広場」

◇松元季久代 「犠牲の美学化」の時代と賢治の風刺精神

—雲に迷うブドリ、引き返す

ジョバンニ—

16：45 休憩

17：00 セッション2

司会・坂巻康司

◇黒岩卓 アルヌール・グレバン作『受難の聖史劇』におけるアダム之死

◇千川哲生 フランス古典主義悲劇における死の表象

12月23日(日)

岩手大学北桐ホール

10：00 セッション3

司会・交渉中

◇谷口円香 日仏女性詩人における死・マルスリーヌ・デボルドーヴァルモールと茨木のり子

◇坂本さやか 「ウエルギリウスの蜜蜂」—ミシュレの『虫』における復活

11：30 セッション4

司会・谷口円香

◇林修 マルグリット・デュラスにおける共同体の再構築

◇福島勲 レネ・デュラス『二十四時間の情事』に見る喪と再生のイメージ

13：00 休憩

14：15 基調講演2

ヴァレリー・ユゴット

通訳・坂巻康司

「私が失くしたこの影」—アンドレ・ブルトンの作品における喪のエクリチュール

《Cette ombre que j'ai perdue》, L'écriture du deuil dans l'œuvre d'André Breton.

編集後記

▽今号も内容満載の通信となりました。賢治に対する思いはそれぞれですが、賢治を媒介にして人と人との結びつきについていく。そのことが不思議でもあり、うれしいです。宮澤賢治センターは、そうした交流の場を提供するプラットフォームの役割を今後も果たしていきたいと思っています。

賢治の盛岡高等農林学校時代の親友・保阪嘉内の地元である山梨県韮崎に初めて行ってきました。嘉内を顕彰するアザリア記念会に依頼され、賢治と嘉内について講演したのです。6年前、達増拓也岩手県知事により贈られたギンドロの苗木が大きくなり成長していたのが目につきました。その後岩手大学では創立60周年を記念して、同人誌『アザリア』の中心となった4人、宮澤賢治・保阪嘉内、小菅健吉、河本義行の輪を今後も発展させようという願いを込めて「アザリアの咲くとき」展が盛大に開催されました。その間岩手大学でアザリア記念会一行を迎える一方、岩手大学からも韮崎を訪問するなど、岩手と山梨との間に育まれた相互交流の輪はいよいよ広がりを見せています。現地の人々と触れ合う中でそのことを実感しました。

私はかつて宮澤家本家十二代・宮澤助五郎氏の著書『小頭と匠—宮澤家の歴史』の編集を手伝いましたが、この本には宮澤家が江戸時代より代々盛岡藩で大工小頭の仕事をしていたと記載されていました。小頭というのは設計監理の責任者で、花巻周辺に現存する神社仏閣などは明治時代になるまで宮澤家により維持管理がなされてきたのです。

盛岡藩の藩主・南部氏は800年ほど前にさかのぼれる由緒ある家系ですが、そのルーツは甲斐国（山梨県）にあります。私は盛岡藩の役人を祖先にもつ賢治が嘉内と親しくなったのは、嘉内が山梨からやってきたことも要因のひとつにあるのではないかと考え、そのことも少し話しました。賢治から嘉内宛の手紙は73通残されていますが、その中に「甲斐国」と宛名が記された手紙が結構あり、賢治の藩政時代への関心を物語っています。保阪嘉内の次男・庸夫さん宅で実物の手紙を見せてもらったときは感動しました。また、訪ねたく思います。韮崎の皆様、どうもありがとうございます。（佐藤 竜一 記）

宮澤賢治センター通信

○発行

〒020-0855

盛岡市上田四丁目三番五号

電話 019(622)6472

FAX 019(622)6493

Email: kenji@iwate-u.ac.jp

HP: http://kenji.iwate-u.ac.jp/

宮澤賢治センター(岩手大学内)

発行責任者 鈴木幸一

印刷 杜陵高速印刷株式会社